同行

令和４年１０月１日

第　５０　号

発行　梅花流師範・詠範の会
会長本間雅憲
題字　初代会長・故加藤信三師
編集者（広報部）近藤俊彦
印刷所（資）由利印刷

梅花流師範・詠範の会事務局
倫勝寺（能代市）山田卓爾
TEL 0185-58-2302

満開の梅の花に包まれ、慈悲のまなざしで我々を見守る唯一無二の観音さま

「梅花観音」東泉寺様（秋田市金足）所蔵

楠の一木彫り・像高一〇六cm（台座含む）

『同行』創刊五十号に想う

秋田県梅花流師範・詠範の会 会長　本間雅憲（ほんまがけん）

この度、『同行』誌が節目となる五十号を迎えることになりました。これまでに秋田県梅花流師範・詠範の会に、また同誌の寄稿や編集にご協力いただきましたすべての皆様方にお礼と感謝を申し上げます。

平成元年十一月に発行された第一号には、当時の会長・亀谷健樹老師が初の機関紙発行に至る思いや、今後の秋田県梅花流、梅花流師範に対する期待の気持ちを熱く語られています。果たしてその思いに応えられているのか心もとないものがありますが、さらに精進いたす所存です。

『同行』第一号発行の頃、私は宗務庁梅花流師範養成所の第八期受講生でした。第一回目の講習は本庁のアクシデントにより都下の寶光寺様で行われました。近くの八王子市で幼女誘拐犯が捕まり騒がしく、重苦しさと不安でいっぱいでした。参加者は約八十名でした。数名の顔見知りがいたことと、何より柴田弘一先生が講師として紹介されたことで安心したものでした。寶光寺様では、境内地に臨時の風呂場を設置するなどお世話になりました。本庁の養成所を宗務庁以外で開催したのは後にも先にもこの時だけではないでしょうか。貴重な経験でした。その後はすべて宗務庁で、三泊四日の講習を年三回二年間通いました。当時の交通事情では往復に一泊ずつ必要で、東京は今ほど近くありませんでした。

講習では全曲を修得するものとし、最終の会に認定検定が行われました。毎回必死に学び、唱えていた日々でした。自分の詠讃歌の原点と考えています。

梅花観音（仏画）

特別寄稿　～五十号の節目を迎えて～

秋田県梅花流機関誌『同行』は、今号をもって大きな節目の第五十号を迎えることができました。創刊から三十四年が経ち、梅花流を取り巻く状況も当時と比べ大きく様変わりしてきております。

梅花流隆盛期をよく知るお二人の歴代会長、亀谷健樹老師と柴田弘一老師より、この度特別にご寄稿いただきました。

梅花流の充実、発展を願って

【師範会二代目会長】
北秋田市上杉・太平寺東堂　亀谷健樹

秋田県梅花流は、昭和三十年頃から始まった。また、県梅花流師範会は昭和四十二年に結成。また、機関誌『同行』は今回五十号の節目を迎えた。内容・体裁ともに充実し慶びに堪えない。

私は師範会二代目会長に任ぜられたが、六年間の任期中、充実した主要な事業などを振り返りたい。

一つ目は、この『同行』創刊を提案した事である。当時は詠讃歌普及の為、詠唱指導に夢中で、機関誌発行まで手を伸ばす余裕はなかった。しかし、何事も記録しなければ成果は残らず、反省もできない。その後、定期刊行によって着実に梅花関係の情報発信ができた。その時々の編集者の労をねぎらい、その功をたたえたいと思う。

「同行創刊号」表紙
平成1(1989)年11月1日発行

二つ目は、『梅花流秋田県五十周年記念誌』出版である。当時、梅花の要職にフリーであった本間俊英師（由利本荘市・恵林寺）に、私はこの大事業の編集を懇願し、やっと引き受けていただいた。その結果、秋田県梅花講の開創からの業績などをつまびらかに集録し、予想以上に綿密な記録集が刊行できた。今更に本間師の功労を多とするものである。

三つ目は、平成十七年に『秋田県梅花講の歌』を制定した事である。その歌詞を作詞させていただく。因みに作曲者は佐藤公一郎氏である（編集部注：同行第二十四・四十五・四十七号参照）。毎年梅花大会の時に斉唱する。それを聴く度に往昔を想い出し、感無量である。

いささか在任当時の感慨にひたったが、終わりに今後の梅花講の在り様について二つ申し述べたい。

遅きに失するが、詠唱指導のみがほとんどの現在から、歌詞解説をなるべく解り易くお話しするよう心がけたい。仏祖の伝記・逸話などに興味を持たせる絶好のチャンスだと思うからだ。

もう一つは、梅花流の講員数が急激に減少の一途をたどる現在、何とかして歯止めをかけられないか。その対策が急務であろう。存続の為、さまざまな試みを実施したい。でなければ〝梅花流〟は伝説になってしまう。

「秋田県梅花講の歌」

作曲者　佐藤公一郎
作詞者　太平寺　亀谷健樹（元師範会長）

一、山はみなもと　朝やけの
　　天をつく杉　湧く清水
　　供えまつらん　みほとけに
　　香華ふくいく　詠衆つどいぬ

二、大地ゆたかに　稲の穂は
　　雨風を経て　いのち満つ
　　学びおさめん　み教えを
　　喜び鈴に　鉦にたくして

三、千古かわらぬ　日本海
　　入り日に波は　慈悲の色
　　共に励まし　やわらぎて
　　梅花の道を　永久にいそしむ

本間俊英師

平成18(2006)年5月発行

五十号、おめでとう

【師範・詠範の会五代目会長】
◆初代編集担当
秋田市金足・東泉寺東堂　柴田弘一

『同行』五十号を迎えたことを心よりお祝い申し上げます。

梅花講の活動は、講習会や検定会、奉詠大会、各講でのお稽古等々、活発に行われてきたが、「講員同士の情報交換とその時々の記録が残されないのは大きなウィークポイントである」との亀谷健樹二代目会長（北秋田市・太平寺）の提案があり、『同行』誌発刊の運びとなった。誌面の題字は、初代師範会会長の加藤信三師（大館市・宗福寺）の揮毫である。

初刊の編集をすることとなった私だが、経験浅く右往左往しながらも会長のアドバイスをいただき、先ずは県の梅花を今日まで盛んにし支えてこられた師範有志の方々に、秋田の梅花の今昔を綴っていただき、当時の写真も提供いただいたものを対談形式にまとめて掲載し、記録として残す作業を行った。

第二号からは編集を他に譲り、より充実した内容やアイデアが組み込まれ、初期の目的である情報交換と記録する役割を存分に発揮してきていると思う。只、年二回発行が叶わぬことが幾度かあったことは残念に思う。

ところで、師範・詠範の会独自に発行する『同行』誌は、梅花情報誌として全国的に希少なのかも知れない。先年よりカラー刷りとなり、更に読みやすさが加わった感がある。

近年、講員の高齢化と共にコロナが講員減少を加速化する中ではあるが、『同行』誌が新しく入講を勧める上でも、その一翼を担う内容充実をと期待するところである。

五十号までの編集者、執筆者の方々、誠にご苦労様でした。

テレホン梅花

☎〇一八（八七三）七六七六（ハナミ　ナムナム）【毎週土曜日にテープが更新されます】

◎柴田弘一正伝師範のお唱えとなります。

【令和四年】
◆十月
一日　廓然
八日　影向（和讃）
十五日　伝光（第一番）
二十二日　伝光
二十九日　慶祝（和讃）
◆十一月
五日　正法（和讃）
十二日　浄心
十九日　四摂法（和讃）
二十六日　成道（和讃）
◆十二月
三日　明星
十日　学道（和讃）
十七日　慕古
二十四日　花供養（和讃）
三十一日　供華

【令和五年】
◆一月
七日　誓願（和讃）
十四日　正行（和讃）
二十一日　道環
二十八日　永平二祖讃仰（和讃）
◆二月
四日　開山忌（和讃）
十一日　真清水
十八日　報恩供養（和讃）
二十五日　澄心
◆三月
四日　涅槃（和讃）
十一日　不滅
十八日　總持二祖讃仰（和讃）
二十五日　永光（永平二祖）
◆四月
一日　永光（總持二祖）
八日　紫雲（高祖）
十五日　紫雲（太祖）
二十二日　道心利行（和讃）
二十九日　菩提（高祖）

〒010-0111　秋田市金足岩瀬字前山３　東泉寺　TEL018-873-2675

表紙について

今号の表紙は、秋田市金足・東泉寺様所蔵の「梅花観音さま」です。柴田弘一東堂老師が、青森県梅花流の有志師範会及び詠範の会の講師を勤めていた御縁で、先ごろ講師退任の記念として御寄進いただいたものだそうです。梅花観音さまは、音楽や美術、お稽古事の上達に功徳のある観音さまでもあります。「お唱え上達・検定合格」を望まれる方は、機会があればぜひお参りに訪れては如何でしょうか？

また、仏像完成を経て描かれた仏画の梅花観音さまは、東堂ご夫妻が金婚式を迎えた際に、梅川順子さん（神奈川県泰野市・圓通寺御寺族）が制作し、御寄贈くださったものだそうです。御住職の龍博師は、東堂老師と永平寺にて共に修行した仲とのこと。尊い法縁から生まれた、慈愛に満ち、気品あふれる美しい表情の観音さまです。

曹洞宗秋田県宗務所

QRコード

スマートフォン等で読み取ると、『同行』過去号から最新号まで閲覧できます。

梅花のふるさと

～詠讃歌の生まれた風景（その二十八　高祖承陽大師道元禅師第二番御詠歌）

水鳥の道・異聞（二）

高祖承陽大師道元禅師第二番御詠歌

水鳥の往くも帰るも跡絶えて
されども道は忘れざりけり
道元禅師和歌

◇ 応無所住而生其心 ◇

このご詠歌は、江戸時代に道元禅師の和歌を集めた『傘松道詠』にあるものです。そこでは「応無所住而生其心」という題がつけられています。これは『金剛経』というお経の言葉です。

達磨大師から六代目の祖師に慧能という方がいました。まだ出家する以前、慧能が街で薪を売り歩いていると、ある客がこの経文を口ずさみました。それを聞いてはっと悟るところがあり、仏門に入るきっかけになったと伝えられています。

「まさに住するところ無くして、しかもその心を生ずべし」。住するとはとどまる、とらわれると理解してみましょう。何かに心がとどまったり、とらわれたりすることなく、必要な働きをする。道元禅師の言葉に、「春声に引かれて春沢に遊ばず、秋色を見るも、さらに秋心なし」（典座教訓）とあります。人は、春めいてくるとうきうきと遊びに出たり、秋になると憂いの思いを抱いたりします。それは心が季節の移ろいにとらわれているから。このように何かに心がとらわれることがなく、自由自在に物事に応じてゆくこと、それを「応無所住而生其心」と言います。

◇ 水上の道 ◇

『傘松道詠』を編集した面山は、和歌のそれぞれを解説した『傘松道詠聞解』を著しています。この和歌については次のように記しています。

水鳥は鴛鴦や白鷗の類、水上の往来なればあとはないけれども、鳥の方では跡を知ておる。されどもとは、去と云う縁語に使う。往き去れども還り去れども道を忘れぬと云うこと。跡たえてと云うが応無所住なり。路を忘れぬと云うが而生其心（後略）。

オシドリやカモメが、池や湖の水面を行き交うと、あとにできた航跡はほどなく消えてしまいます。しかし水鳥たちはその見えない路を迷うことなく往還する。それが「応無～」の消息である、というのです。道元禅師の和歌に関する研究は面山の業績が代表的なものとされ、それは今日の梅花流にも承け継がれています。

現在、梅花流師範が参考にしている『梅花流指導必携解説篇』においても、この御詠歌の情景は次のように解説されています。

水面に遊ぶ鳥がさわりなくすいすいと自由に泳いでいます。「往くも帰るも」は水鳥があちらこちらと泳いでいる情景であり、「跡絶えて」は水鳥の泳いだ後にのこる波の跡がなくなっていくさまです。跡はないけれども歩むべき道を忘れてはいません。「されども道は忘れざりけり」と詠われています。

水上の道

面山から梅花流指導必携までの間に、道元禅師の和歌に関する解説はいくつもなされましたが、ここではその中の一つ、大場南北の『道元禅師和歌集新釈』（一九七二年）の解釈を挙げてみます。

湖上に遊ぶ鳥に水路らしいもの、レールらしいものは一行に見当らないのに、その足取りは縦横無礙・自由自在であり、その通り過ぎた跡はたちまちかき消えて、何らの拘泥駐留渋滞の跡もなく、尋ねようにも全く蹤跡はない。それにもかかわらず（されども）一行に逸脱する処も、法を踏み越すところもない。これは住着なくしてその心生ずるからである。という意味を水に遊ぶ鳥に譬えて述べたものである。

このように和歌の解釈は面山以来、水面を往き来する水鳥の道あとが、一つの情景となってきたことがわかります。

けれども私はちょっと引っかかりを感じます。実際、水上を行く鳥の跡は消えてなくなりますが、だからと言って鳥の泳ぎ回るようすはそれほど特別なものでしょうか。たしかに水上を自由に動き回る鳥のようすに、物事に執着せず自在に行動する心のはたらきをなぞらえることはできそうですが、「水路らしいもの、レールらしいものは一行に見当たらないのに」というほどのことだろうかと思うのです。でももしこれが水上ではなく、空飛ぶ鳥の道としたらどうでしょう。その動きは水上に較べてはるかに広くなります。渡り鳥などを想定すればさらにスケールは大きくなります。いずれも「水鳥の道」に変わりはありません。面山以来続いてきた解釈に、「空の道」という解釈を加える可能性はないものでしょうか。

◇　空の道　◇

空飛ぶ鳥の道、これは単なる思いつきではなく、曹洞宗の伝統的な教えの一つに「鳥道（ちょうどう）」ということがあるのです。それは水上の道ではなく、空の道を指すものでした。

「曹洞」宗の名前の由来になった洞山（とうざん）という中国の祖師がいます。洞山は修行者を指導する場合に、三種類の手段を用いました。これを洞山三路といいます。三路とは鳥道・玄路・展手というものでした。そのひとつ鳥道について、洞山がある僧と問答を交わしている記録があります。

空の道

僧問う、師（洞山）はふだん修行者に鳥道を行くように指導されていますが、鳥道とはどういうものですか。
師云く、誰にも逢わないところだ。
僧云く、ではどのように行けばよいのですか。
師云く、決して靴を履いてはならぬ。
僧云く、鳥道を行くというのは本来の面目ということではありませんか。
師云く、君、どうして間違えるのだ。
僧云く、どこが私の間違いなんですか。
師云く、間違いでなければ、召使いと主人を取り違えたりしないだろう。
僧云く、いったい本来の面目とはなんですか。
師云く、鳥道を行かないことだ。

一見なんだかよくわからないやりとりのようです。質問した僧は、洞山が「鳥道」という手段でふだんから修行者を指導していることを知っていて、しかもそれが本来の面目すなわち真実のさとりに到るものだとあらかじめわかった上でこれを聞いているようです。しかし洞山は僧の考えを否定します。では誰にも逢わないところ、靴を履いてはならないところの鳥道とはいったい何でしょう。

じつは道元禅師もまた鳥道についてご自分の考えを述べています。その考えを手がかりに、鳥道について考えてみましょう。（つづく）

文責・佐藤俊晃

『同行』表紙一覧

～創刊号から第50号まで～

編集担当が語る『同行』五十号までの歩み

『同行』は三十四年間、歴代六人で編集担当のバトンを繋いできました。県内梅花諸行事の告知・実施報告はもちろんのこと、県内梅花流先達の貴重な言葉の数々を収めた「秋田の梅花流」や「こころをよむ」、個性豊かな県内各講の活動紹介「おらほの梅花講」、そして連載十八年を数える機関誌の屋台骨・佐藤俊晃先生執筆の「梅花のふるさと」等、各々が独自に工夫を凝らした誌面作りを行ってきました。

ここでは、平成と共にあった『同行』の初期・中期・中後期をそれぞれ担った御三方に、その歩みを振り返っていただきました。

これも「縁」でした

◆二代目編集担当

北秋田市新田目・新田寺住職

保坂春聽

たしか平成元年のある時、当時師範会の事務局長の浄福寺様（奥山芳寿老師）に所用で伺ったら、運悪く、初代編集担当の東泉寺様（柴田弘一老師）が『同行』創刊号の打合せで来ておりました。これが「運の尽き」でした。用件が終わって帰ろうとすると「お茶を飲んで行きなさい！」と言われ、そこには、東泉寺様がニコヤカな顔でお座りでした。嫌な予感がしましたが、発行についての意見を求められて、若気の至りでペラペラと喋ってしまった私でした。案の定、第二号から編集担当になりました。しかしながらズボラな性格の私です。発行期限を守らず、関係の皆様には大変迷惑を掛けてしまいました。今更ながらお許しください。

掲載記事では、歌詞解説の「こころをよむ」と、梅花関係者よりのエッセイコーナー「チョットぶじょほう」、それに、第七号より「写真で見る基本作法」を掲載しました。連続写真のようにして作法を分解しようとしましたが、力不足で難しいものがありました。

皆様には申し訳ございませんが、これもご縁で良い経験をしたと思っております。以後は、有能な方々が編集担当となり、目出たく五十号を迎えることが出来ました。偏に読者の檀信徒講員様のお陰です。ありがとうございました。

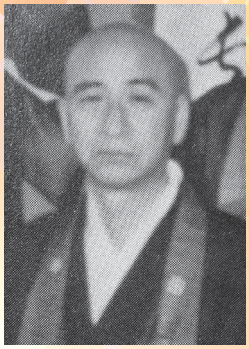
第五十号おめでとうございます

◆四代目編集担当

北秋田市七日市・龍泉寺住職

佐藤俊晃

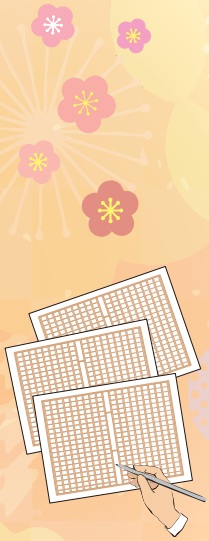
平成元年の創刊以来ずっと変わらないものの一つ。それは『同行』の題字です。この書は初代師範会会長、大館市・宗福寺の故加藤信三老師の手になるものでした。老師は法要行持に造詣深く、物腰のやわらかさと毅然とした威厳の両面を兼ね備えた人でした。その御人徳は広く衆目の一致するところでした。ある書道講師のお話を聞いたことがあります。「加藤師の書は、おそらく一般の書道を習ったものではないでしょう。しかしすばらしい。あの文字は書家では書けないものです。」と。私にはもとより書の巧拙を評する力はありませんが、この方の言葉には深く共感させられるものがありました。



加藤信三老師

思えば秋田県の梅花流草創期は、いわゆる「ご詠歌上手」というのみでなく、法堂進退・声明・人望など、まさに他に抜きんでた御老師たちが牽引してくれました。お唱えだけでなく、ひとりの僧として真にすぐれた人が梅花をやる。だからまわりがついて行く。そんな思いを抱いていました。

『同行』の題字を見るたびにその思いを新たにし、自分のいたらなさを反省しています。短い間でしたが、この誌面編集のお手伝いをさせていただいたことはありがたいことでした。これからもこの字に叱咤され、励まされていきたいと思います。



『同行』の編集を顧みて

◆五代目編集担当

北秋田市上杉・太平寺住職
亀谷隆道

その任務は突然回ってきた。前任者だった方が、御法務・宗学仏典研究・布教梅花活動等で多忙を極め、発行が遅延してしまったとの事。「次、宜しく。」との事で、そこから私の「同行～同修」は始まった。引き継ぎ、発行してみて思ったのは、色。黒一色刷りから紫色に変更。すると写真、活字にも少しメリハリがついた。毎回、表紙の写真と御詠歌の一節を決めるのに苦労した。「蓮の花のトンボ」（第二十七号）とか、「鮭川村のトトロ杉」（第四十号）とか、撮れた時には嬉しかった。

また、「梅花のふるさと」での逸話に納得感動し、その時々の寄稿文、東日本大震災の支援に入った浅田師範の話、祈りとしての梅花、講員さんの梅花入講の話等々、心に残った。ただ、時代と共に大会や研修会の感想を寄稿していただく人が減り、「おらほの梅花講」も〈講員不在〉ということで断られ、高齢講員減少化の流れを感じた。約十五年近く、二十号分の編集発行に携わってきたが、平成の終わり頃には持続不可能になり退任した。

最後に思う事は、発行中期に寄稿していただいた県北部の若き師範さんの事。彼は故郷の町を盛り上げる為に十二月暮れの街路樹にイルミネーションを飾り付け、LEDの光で《闇を照らし、明るい世の中を作っていた》（第三十四号参照）。今でも彼は梅花を続けているだろうか。

◎九月十四日（水）、大曲市民会館を会場に三年振りの開催となった『梅花流秋田県六十五周年記念奉詠大会』の様子は、次号にてたっぷりとお伝えする予定です。

★編集後記★

皆様、いつも『同行』をご愛読いただきありがとうございます。今回、「五十」という節目を記念号として振り返ってみました。六頁のように表紙一覧で俯瞰して見ると、歴代編集担当の誌面に込めた梅花への想いや編纂の苦労が改めて浮かび上がってくるような気がします。▼昨年、『同行』バックナンバーのデータ化を行ってから過去記事へのアクセスが容易にできるようになりました。私は今風を気取ってタブレット端末に入れて管理していますが、歴代編集者や先達師範の皆様からしてみれば、若い頃の仕事や御姿が指先一つで掘り起こされ、少々複雑な心境かもしれません。どうかお許しを…（令汗）▼任期も残り少なくなってきました。年二回発行の圧を背中にいつも感じつつ、機関誌を心待ちにしてくれている方々の為にも、最後までしっかり広報部の仕事を全うしていきたいと思います。また、折に触れてサポートしてくださるもう一人の広報部員、岩舘香央里さん（鹿角市花輪・恩徳寺寺族）にもこの場を借りて感謝申し上げます。（俊彦）

『同行』発行年表

号数	発行年	西暦	会長	事務局	編集担当	印刷所
1	平成１年	1989	二代目 亀谷健樹	奥山芳寿	柴田弘一	武石印刷
2	平成２年	1990			柴田弘一・保坂春聽	
3						
4	平成３年	1991				
5						
6	平成４年	1992				
7	平成５年	1993				
8	平成６年	1994			保坂春聽	
9					岩舘祖芳	グラコン社
10	平成７年	1995	三代目 佐藤仁鳳	佐藤俊晃	保坂春聽	武石印刷
11	平成８年	1996				
12	平成９年	1997	四代目 丹生純雄			
13	平成10年	1998				米倉印刷所
14						
15	平成11年	1999	五代目 柴田弘一	嶋森憲雄		
16						
17	平成13年	2001				
18	平成14年	2002			佐藤俊晃	菅原印刷・北秋タイプ
19						
20	平成15年	2003				
21						
22	平成16年	2004				
23						
24	平成17年	2005			亀谷隆道	米倉印刷所
25	平成18年	2006				
26	平成19年	2007				
27						
28	平成20年	2008				
29						
30	平成21年	2009				
31						
32	平成22年	2010	六代目 岩舘祖芳	伊藤道人		
33						
34	平成23年	2011				
35						
36	平成24年	2012				
37	平成25年	2013	七代目 本間雅憲			
38						
39	平成26年	2014				
40						
41	平成27年	2015				
42						
43	平成28年	2016				
44	平成31年	2019				
45	令和１年					
46	令和２年	2020				
47						
48	令和３年	2021		山田卓爾	近藤俊彦	由利印刷
49	令和４年	2022				
50						